

# 人間的労働の経済学的考察（九）

山本二三丸

は し が き

一 人間的労働の基本的意味……………（以上、第十四卷第四号所載）

二 本来の私的所有のもとの人間的労働

- (1) 本来の私的所有の意味
- (2) 社会的富の規定

(一) ……………（以上、第十五卷第三号所載）  
 (二) ……………（以上、第十五卷第四号所載）  
 (三) ……………（以上、第十六卷第一号所載）

(3) 商品生産における労働の二面性……………（以上、第十六卷第一号所載）

(4) 私的労働の社会的性格……………（以上、第十六卷第二号所載）

(5) 労働の対象化……………（以上、第十六卷第三号所載）

(6) 価値法則

(一) ……………（以上、第二十九卷第一号所載）  
 (二) ……………（以上、第二十九卷第二号所載）  
 (三) ……………（以上、本号所載）

人間的労働の経済学的考察（九）

- (7) 所有法則（交換の法則）……………（以下、次号所載予定）
- (8) 価値の自立化
- (9) 発展法則
- (10) 商品生産のもとの人間的労働のあり方
- 三 人間的労働力の商品化
- 四 資本制的私的所有のもとの人間的労働
- 五 社会的所有のもとの人間的労働
- 六 総括

## 二 本来的私的所有のもとの人間的労働

### (6) 価値法則

#### (一)

(2) マルクス「価値規定」の字野氏による「原理論」的解釈

はじめに氏の主著のなかから比較的適当とおもわれる部分をぬきだしてお目にかけよう。これは、主著第一章第一節のうちの「かくしてまたあらゆる生産物がその生産に要する労働時間によってえられるという労働生産過程の一般的原则は、商品経済の下にあっては、その交換の基準としての価値法則としてあらわれるのである」（前出、五五ページ、傍点―山本）という文章につけられた注（2）の全文である（原文には区切りは全くないが、以下での検討の便宜のため適宜段落をつけ、それぞれの頭に①、②……という番号をつけることにした。なお傍点およびゴシック体はすべて山本のもの）。

「①商品の交換が、その商品の生産に要する労働時間を基準とする、その価値によって規制せられる」ということは、如何なる社会にあつても、何らかの生産物をうるには、時によつては、また人によつては異なるにしても、一定の量の労働を要するものであるという一般的な原則に基くものであつて、いわゆる労働価値説はこれだけでも否定しえないものと考へてよいのであるが、しかし商品の価値の実体を労働と規定し、その法則的展開を論証するということは、それだけでは十分ではない。

②例えばマルクスの場合にしても、先ず小麦と鉄との二商品の交換関係をあげ、それらが適當の比率をもつて交換せられるといふことは、互にその使用価値が捨象されて等置されることにほかならないといふことから、商品体の使用価値を捨象して残るのは労働生産物としての一面であり、しかもそれは無差別の人間の労働力の支出であるというように規定して、その労働価値説の論証としているのであるが、それはなお労働力の商品化を基礎にして展開される資本の生産過程におけるような、いわば積極的な証明とはなっていない。

③商品体の使用価値の捨象といふことも、商品の交換関係に留まらず、生産過程自身においてあらゆる生産物の生産を任意に選択しうるといふ資本の場合に始めて具体的に展開されるものとなる。

④實際また「商品世界の諸価値に表わされる社会の総労働力は、無数の個別的労働力から成つてはいるのであるが、ここでは一つの同じ人間労働力とみなされる。これらの個別的労働力のおのおのは、それが社会的平均労働力という性格をもち、このような社会的平均労働力として作用し、したがつて一商品の生産においてもただ平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間だけが必要とするかぎり、他の労働力と同じ人間労働力なのである。社会的に必要な労働時間とは、現在の社会的に正常な生産条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもつて、なにか或る使用価値を生産するために必要な労働時間である」(『資本論』第一卷「イ」四三頁)というマルクスの規定も、資本の下に労働力が商品として購入されて行われる生産過程において始めて具体的に想定しうることである。それは古代、中世の諸社会における商品交換については勿論のこと、資本主義社会においても多かれ少なかれ残存する小商品生産者の場合にも、そのままにはいえないことである。

⑤もっとも上述のマルクスの規定は、「一商品の価値がその生産中に支出される労働量によつて規定されるとすれば、ある人が怠惰または不熟練であればあるほど、彼はその商品を完成するのにそれだけ多くの時間を必要とするので、彼の商品はそれだけ価値が大い、というように思われるかもしれない。」(同上)という誤解に対して述べられているのであつて、種々異つた商品がその生産に要する労働時間によつてその価値を決定されるという問題と、同じ商品が人によつてその生産に要する労働時間を異

に、する場合にも、同一の価値規定を受け、という市場価値の問題——この問題については後に第三篇第一章「利潤—山本」で解明する——とが共に考えられているようである。

⑥ 上述の規定の後に引きつづいて述べられている「たとえば、イギリスで蒸気織機が採用されてからは、一定量の糸を織物に転化するためには、おそらく以前の半分の労働で足りたであろう。イギリスの手織工はこの転化に實際は相変らず同じ労働時間を必要としたのであるが、彼の個別的労働時間の生産〔物—山本〕は、いまではもはや半分の社会的労働時間を表わすにすぎなくなり、したがってそれ以前の価値の半分に低落したのである。」（同上）という例解も、第二の市場価値の問題であって、ここで解明すべき「諸価値の実体をなす労働は、同じ人間の労働であり、同じ人間の労働力の支出である。……」という第一の問題点は、それがために反って不明瞭になっている。

⑦ なおマルクスは、この価値を形成する人間の労働について「それは、平均的にだれでも普通の人間が、特別の発達なしに、その肉体のうちにもっている単純な労働力の支出である」（同上「イ」四九頁）ことを明らかにした後に、「より複雑な労働は、ただ数乗された、またはむしろ数倍された単純労働にすぎないものとみなされ、したがって少量の複雑労働がより大量の単純労働に等しいことになる。この還元が絶えずおこなわれていることは、経験の示すところである。或る商品がどんなに複雑な労働生産物であっても、その価値は、その商品を単純労働の生産物に等置し、したがって、それ自身ただ単純労働の一定量を表わすにすぎないのである。種々の労働種類がその度量単位としての単純労働に還元される種々の割合は、一つの社会的過程によって生産者の背後で確定され、したがって生産者たちには慣習によって与えられたものである。」（同上）といっているのであるが、これは種々異った生産条件のもとに生産された生産物が、商品として交換される場合にも、価値としては同質のものであるという、商品交換の一般的规定を述べるものにすぎない。

⑧ マルクスの場合は、価値の実体が労働によって形成せられるということをお論証しえない、いわゆる商品生産一般において論証しようとしたために、複雑労働の単純労働への「還元」をも「生産者の背後で確定され」るものとせざるをえなくなったのである。

⑨ 商品経済は、生産物の交換による社会関係の確立と拡大とを求めるものであって、その本性としてあらゆる生産物に価値としての同質性を要請する。

⑩ 労働力の商品化による資本主義の発展は、従来の社会には見られなかった生産部面にも、かかる要請を具体的に実現すること

になったのである。

⑭マルクスは「……われわれの資本主義社会では、労働需要の方向の変化に従って、人間的労働の一定部分が、あるときは裁縫の形態で、あるときは織布の形態で供給される。このような労働の形態転換は、摩擦なしにはすまないかもしれないが、とにかくおこなわれなければならない。生産活動の規定性、したがってまた労働の有用的性格を無視するとすれば、労働に残るものは、それが人間的労働力の支出であるということである。裁縫と織布とは、質的に違った生産活動であるとはいえず、両方とも人間の脳、筋肉、神経、手などの生産的支出であり、この意味で両方とも人間的労働である。それらは、ただ人間的労働力を支出するための二つの違った形態であるにすぎない。たしかに人間的労働力そのものは、あの形態やこの形態で支出されるためには、多かれ少かれ発達していなければならない。商品の価値は、しかしただの人間の労働を、人間的労働「力」山本」一般の支出をあらわしている。」(同上「イ」四八―九頁)というのであるが、ここでも「労働の有用的性格を無視するとすれば」という言葉が、先きの交換関係における交換としての「無視」を意味するものとすれば、なお「労働に残るもの」が「人間的労働力の支出」であるとしても、その根拠を明確にするものとはいえない。

⑮それに反してこの「無視」が、資本にとつての、したがってまた労働者にとつての「労働の形態転換」による「無視」にほかならないとすれば、それはもはや単なる「無視」ではなくて、特定の「有用的性格」そのものを目的しながら何れにも「転換」しうるものとしての「無視」となるわけである。

⑯それには勿論「人間的労働力そのもの」が「多かれ少かれ発達していなければ」社会的に必要なあらゆる生産面に全面的に展開されるものとはいえない。

⑰資本家の生産過程は、労働力の商品化によって、かくの如き全面的な根柢的な商品生産を実現するものとして、商品の価値が労働によって形成されるものであることを明らかにするものとなる。

⑱労働価値説の論証は、従来の方法と異って「資本の生産過程」において行われなければならないものと考えるのである」(前出、五五―五九ページ)。

ここに引用した一節の内容がどういう性格のものであるかということとは、すでにこれまでマルクスの「価値規定」、すなわち価値法則の基本的内容と、『資本論』の「原理論」的読み方について吟味してきたところによって、ほぼ察

しがつくと思われるが、なお念のため、さきの検討をふまえて、その特徴的な点を簡単にみておくことにしよう。

1 まず「交換の基準としての価値法則」（本文）とか、「商品交換が、価値によって規制せられる」（①）とかいう文章によって、宇野氏が、「商品の交換が価値によって規制せられる」ことをもって「価値法則」そのものの基本的内容と解していることが示されている。しかし、これは「価値」を「交換価値」と混同するものであり、もっぱら「交換価値の大きさの規定」を追究したスミスの後塵を拝するものといつてよい。こうしたスミスの混乱は、つぎの「いわゆる労働価値説」という特異な「術語」にも示されている。

2 「いわゆる労働価値説」という言葉を「どんな社会でも生産物をうるには一定量の労働を要するものだ」という一般的な原則」（①）に直結して説き、「商品の価値の実体を労働と規定し」（①）とか、「価値の実体が労働によって形成せられる」（⑧）とか、「商品の価値が労働によって形成されるものである」（⑭）とかいった主張をくりかえしかかけているという事実、宇野氏が、マルクスの「価値概念」を全然理解していないこと、肝腎の「労働の二面性」の把握の欠如していることを、端的に示すものである。二世紀前のスミス流の「労働価値説」にしがみついて「その法則的展開を論証する」（①）などという、「しゃれた」文句を並べても、それは空文句の上塗りというものである。ところが、宇野氏は、もっぱら、こうした「労働価値説」と「論証」という、二つの言葉をひねくりまわして、マルクスそののひとにいいがかりをつけ難癖をつけているのである。

3 ②で「マルクスがその労働価値説の論証としている」として並べられているのは、全部マルクスの叙述の誤読かまたはこれを贗造したものである。マルクスは「先ず小麦と鉄との二商品の交換関係をあげることなどしていない。」「それらが適當の比率をもって交換せられるということは、互にその使用価値が捨棄されて等置されることにほかならない」などという

ことは、マルクスは露ほども言っていないし、ましてや、これにもとづいて「商品体の使用価値を捨象し」たり、その「残るものが、無差別の人間の労働力の支出である」と「規定」したりするようなことは、マルクスの頭に浮んだことすらない。マルクスにたいして、かれは「交換関係における交換としての『無視』」(⑪)ということで「商品体の使用価値を捨象」し、これによって「その労働価値説の論証としている」(②)が、それは誤りだ、「積極的な証明になっていない」(②)、「その根拠を明確にするものとはいえない」(⑪) などといった言いがかりをつけるだけのことならば、誰にでもたやすくできる。だが、お気の毒にも、当のマルクスは、あとで見えるように、「労働価値説の論証」とか「その根拠を明らかにする」こととくに血道をあげている手合をば徹底的に嘲笑しているのである。

4 「マルクスのように、商品の交換関係だけをとりあげて商品の使用価値の捨象」「無視」を論じたのでは、労働価値説の論証はおぼつかない。乃公自身がやっているように、資本の生産過程自身について労働価値説の論証をおこなうべきである。それは、資本の生産過程そのものにおいてこそ、商品の使用価値の捨象「無視」が具体的に、全面的に展開されるからである」(②、③、⑪、⑫、⑬、⑭および⑮) という、まさにマルクスを超越してやまない画期的主張を「根拠」づけるために、宇野氏は、マルクスの「価値規定」にかんする叙述のなかからばらばらに五つの引用をおこない、これらについて、氏独特の「原理論」的解釈を加え、これらをことごとくマルクス論難の材料に仕立てあげている。そこで、これらの五つの引用について、氏の引用の仕方、その「加工」の成果を簡単に検討することが要請されるが、そのまえに、「生産過程そのものについての論証」という、氏のかかげうる唯一のお題目に関連して、二つの事実を確認しておくことが適切である。第一の事実、宇野氏自身「生産過程そのものについての論証」など、これっぽっちもするどころか、むしろスミス式「労働価値説」をうのみにして、これにマルクスの説明を絵どったものをくつつけているだけだということ

ある。このことはすでに前稿で十分実証されたので、ここでは⑤に示された自家宣伝的「結論」のはっきりを注意するだけにとどめよう。第二の事実、は、「資本の生産過程そのものにおいてこそ、商品体の使用価値の捨象」『無視』が具体的に、全面的に展開されるのである」というような、まさに現実の資本家をひとりのこらず驚倒させずにはおかぬような「主張」を宇野氏がこしらえあげたについては、氏が、「特定の労働にたいする無関心」つまり「労働の具体的形態にたいする無関心」と「労働の転換」とにかんするマルクスの叙述に眼をつけ、これらの「無関心」および「転換可能性」がいずれも「商品体の使用価値の捨象」『無視』と同じ事柄を指したものだと思ひこみ、これらのマルクスの叙述をば、右の「資本の生産過程そのものにおいてこそ、商品体の使用価値の捨象」『無視』が具体的に全面的に展開されるのである」といった「主張」の「根拠」として利用している、ということである。そして、「労働の転換可能性」にかんするマルクスの叙述は⑩のなかで「公けに」引用されているが、「特定の労働にたいする無関心」にかんするマルクスの叙述はこれをまったく明示しないという、手のこんだ工夫がほどこされているのである。われわれはこの後者の叙述をすぐあとで読者のお目にかけようが、ここではとりあえず、「特定の労働にたいする無関心」も「労働の転換可能性」も「商品体の使用価値の捨象」『無視』とはまったく異なったものであること、また、商品体の使用価値を捨象し無視したのでは、使用価値と価値とを生産する過程としての資本の生産過程そのものは、言葉そのものとして、また現実においても、まったく成り立ちえないものであること、この二つの自明の事柄について読者の注意を促しておくことにし、宇野氏がその現実離れした「主張」を裏付けるために「陰に陽に」「援用」しているマルクスの叙述部分について、その内容を簡単にみておくことにしよう。

5 まずはじめに、宇野氏がひそかに拠り所としているマルクスの叙述をあげておくのが適當である。マルクス



は、名著『経済学批判』への『序説』の「3 経済学の方法」のなかで、経済学の範疇の概念的展開と歴史的展開との関連を詳細に論究しているが、そこで「労働一般」について、つぎのように述べている（……は中略部分）。

「労働はまったく簡単な範疇のように見える。このような一般性においての——労働一般としての——労働の観念もひじょうに古いものである。それにもかかわらず、経済学的にこの単単性において把握されたものとしては、「労働」は、この簡単な抽象を生み出す諸関係と同様に近代的な範疇である。……………」

富を生み出す活動のあらゆる限定を放棄したのは、アダム・スミスの大きな進歩だった。——マニフアクチュア労働でもなく、商業労働でもなく、農業労働でもないが、しかもそのどれでもある単なる労働。富を創造する活動の抽象的一般性とともに、いまやまた、富として規定される対象の一般性、生産物一般、あるいはさらにまた労働一般、といっても過去の対象化された労働としてのそれ。この移行がどんなに困難で大きかったかは、アダム・スミス自身もまだときどき再び重農主義に逆もどりしているということからも明らかである。ところで、これによつては、ただ、人間が——どんな社会形態のもとであらうと——生産をするものとして現われる最も簡単で最も古い関係をあらわす抽象的な表現が見いだされるだけのようには思われるかもしれない。これは、一面から見れば正しい。他面からは正しくない。労働の一定種類にたいする無関心は、現実の労働種類のひじょうに発展した総体を前提するのであつて、これらの労働種類のどの一つもはやいっさいを支配する労働ではないのである。こうして、最も一般的な抽象は、一般にただ、ある一つのもので多くのものに共通に、すべてのものに共通に現われるような、最も豊富な具体的な発展のもとでのみ成立するのである。……………他方、このような労働一般という抽象は、たんに種々の具体的な総体の精神的な結果であるだけではない。特定の労働にたいする無関心は、個々人がたやすく一つの労働から他の

労働に移り彼らにとっては労働の特定の種類は偶然でありしたがってどうでもよいものになるといふ社会形態に対応する。労働は、ここではたんに範疇としてだけでなく現実にも富一般の創造のための手段になっており、職分として個人と一つの特殊性において合生したものでなくなっている。このような状態は、ブルジョア社会の最も近代的な定在形態——合衆国——で最も発展している。だから、そこで、「労働」「労働一般」、単なる労働という範疇の抽象が、近代的経済学の出発点が、はじめて真実になるのである。だから、近代的経済学が先頭に立てているもつとも簡単な抽象、そしてすべての社会形態にあてはまるひじょうに古い関係をあらわしているもつとも簡単な抽象は、それにもかかわらず、もつとも近代的な範疇としてはじめて、実際に真実にこの抽象においてあらわれるのである。……

この労働の例が適切に示しているように、もつとも抽象的な範疇でさえも、それが——まさにその抽象性のゆえに——どの時代にも妥当するにもかかわらず、このような抽象の規定性そのものにあつてはやはり歴史的諸関係の産物なのであつて、ただこの歴史的諸関係だけにたいして、またただこの諸関係のなかだけで、十分の妥当性をもっているのである」（マルクス・エンゲルス全集、第十三巻、六三四—六三六ページ、傍点およびゴシック体——山本）。

みられるように、マルクスは、「労働一般 *Arbeit überhaupt*」「単なる労働 *Arbeit schlechthin*, *Arbeit sans phrase*」という、もつとも抽象的な、「近代的経済学が先頭に立てている」もつとも簡単な範疇が、「種々の労働の具體的な総体の精神的結果」であり、正しい論理的抽象によって得られたものであり、「人間が——どんな社会形態のもとであろうと——生産をするものとしてあらわれるもつとも簡単なもつとも古い関係」を抽象的に表現するものであるが、それにもかかわらず、それが「実際に真実にこの抽象においてあらわれる」のは、もつとも近代的な社会「資

本主義社会においてである、ということの説明している。もっとも簡単に抽象的な範疇として「労働一般」「単なる労働」は、近代的経済学の理論体系のうちで「先頭に立っている」「出発点」であるが、それがその抽象において「実際に、真実になる」のは、歴史的にもっとも発展した近代ブルジョア社会である。ここにわれわれは、経済学の理論体系の「序列」を考えるさいのもっとも重要な問題、すなわち、概念的展開と現実の歴史的展開との関連をいかに正しくとらえるべきかという問題と、これにたいする、「労働一般」を例としてのマルクスの説明とを学びとらなければならないのであって、「経済学の方法」の核心的問題のひとつはまさにここにこそ存するといつてよい。

ところで、「労働一般」「単なる労働」とは、「労働の具体的形態の捨象」であり、それが「実際に真実になる」のは、「労働の一定種類にたいする無関心」が一般的である近代資本主義社会においてである。つまり、「特定の労働にたいする無関心」とは、この場合、「労働一般」・「労働の具体的形態の捨象」という抽象的な範疇が、資本主義社会において現実、この抽象においてあらわれている、いわばひとつの歴史的な存在形態にすぎない。それゆえ、「特定の労働にたいする無関心」は資本主義社会で具体的に もっともひろく展開されていることは真実であるが、ここから「労働の具体的形態の捨象」「労働一般」が資本主義社会で「具体的に」 もっともよく「展開され」ているとか、それだから「労働の具体的形態の捨象」は資本主義社会において——それも「資本の生産過程において」——「論証」されなければならないとかいった「主張」を唱えたとすれば、このような「主張」はもはや手のつけられない曲解、錯乱および詭弁のよせあつめとしか言いようのないものである。こういう「論者」は、そもそも、「概念」とか「範疇」とかいふ、もっとも初歩的・基本的用語についての完全な無知をさらけだしているのであって、「理論」など論ずる資格はまったくないといつてよい。

これまでたびたび示されたようにマル、クスの叙述を無断借用してこれを紛らわしい形につくりかえては自説の「根拠」にするという、特異の才能に恵まれている宇野氏は、おそらく、右のマルクスの「経済学の方法」にかんする叙述を読んで、そのなかから、「労働の具体的形態の捨象」、「特定の労働にたいする無関心」、「最も豊富な具体的な発展のもとでのみ成立する、十分な妥当性をもつ」、「近代ブルジョア社会」といった言葉を拾いあつめ、「労働の具体的形態の捨象」を「商品体の使用価値の捨象」に横すべし、とせ、「特定の労働にたいする無関心」をば「労働の形態転換」による『無視』にずらし、かくして、たちまちのうちに、「商品体の使用価値の捨象」——「労働の形態転換」による『無視』——「資本主義社会で資本の場合にはじめて具体的に展開」——「資本の生産過程においてのみ、労働価値説の論証はなされる」といったひとつながりの「理論的」文章をこしらえあげるにいたったものと、推察されるのである。こうした一連の「理論的」文章のつづりあわせがさきの「論者」の「主張」とまったく同じ性格のものであることは、ほとんど疑いないが、右の推察がけつして「根拠」を欠いたものでないことも、じきに明らかとなるであらう。

ただ一言、ここに申しそえておけば、さきのマルクスの叙述における「労働の具体的形態の捨象」という言葉は、「労働一般」または「単なる労働」という範疇の抽象を示すものである。だが、これを横すべしとさせることでつちあげた右の「つづり合せ」の冒頭におかれたところの「商品体の使用価値の捨象」とは、いったい、なにを示しうであらうか？ おそらく「価値そのもの」または「たんなる価値」を描いてはほかに意味しうるものはないであらう。そこで、この意味を、たとえば、こころみに③にあてはめてみると、つぎのようになる。——曰く「価値そのもの、たんなる価値は、資本の場合に始めて具体的に展開されるものとなる」！これは、「原理論」的たわごとと錯乱とをもっともよく「具体的に展開」したものだといつてよい。

6 マルクスの叙述からの「援用」として「公けに」示されている引用の第一は、④にあるように、「商品世界の諸価値に表わされる社会の総労働力は」にはじまり「社会的必要労働時間」の説明に終る一節であるが、この個所は、すでに本稿の(七)において詳細に説明した(本誌第二十九巻第一号、六七—七一ページ参照)ように、個々の商品生産者の個別的労働力の支出である個別的労働と「価値の実体」である「抽象的・人間的労働」の社会的性格との関連という、「価値規定」における核心ともいふべき問題を追究しているものである。ところが、この個所を引用して、宇野氏は、こういう「マルクスの規定も、資本の下に労働力が商品として購入されて行われる生産過程において始めて具体的に想定しうることである」といったこじつけを並べている。個別的労働と社会的労働との関連の論究にとって「資本」とか「労働力」商品」とか「生産過程」とかいう言葉が、いったい、どういう意味をもつというのであろうか？ また、こういう言葉にむりやりくっつけることで右の「マルクスの規定も始めて想定しうることである」といつてみたところで、「規定」は「想定」とは全く無縁であつて、「想定」をいくら「具体的に」してみてもそこから「規定」は出てきっこないのである。宇野氏は、「古代、中世の商品交換」や「資本主義社会の小商品生産者」を指して、それらの場合には「そのままにはいえないこと」だと言っている。だが、たとえ商品交換者がどんなに少なからうと、かれらの提供する商品の「価値」の大きさはどのようにして「規定」されと考えるのであるか？ 宇野氏も「労働価値説」をとっているようであるが、たとえば、Aがその生産物Xの一定分量に10労働時間をかけ、Bがその生産物Yのある分量に5労働時間を要したとすれば、両者の「価値」の大きさは、10時間対5時間というようになるのか？ Aの労働はAの個別的労働力の支出であり、Bの労働はBの個別的労働力の支出であり、両者の労働力そのものはつねに同一の質ではありえないというのに、どうして、Aの10労働時間とBの5労働時間とを同じ質のものとして量的比較をすることができるか？

両者の量的比較なくして交換はありえず、量的比較は質的同一性を前提とすることぐらい、誰ひとり知らない者はいない。とすれば、A、B、C等々、すべての個別的労働力の支出としての個別的労働は、同じ質をもつ社会的労働に「還元」されなければならない。つまり、同じ社会的労働としてはじめて、かれらの商品はそれぞれある一定の大きさの「価値」をもち、それによつてはじめて交換されることができることになる。それゆえ、たとえ「古代、中世の商品交換」であろうと、「資本主義社会の小商品生産者」であろうと、労働生産物が商品として交換されるかぎり、そこでの商品生産・商品交換にたずさわる者全部を包括する範囲において、各個別的労働は同じ質の社会的労働に「還元」されなければならない。そのかぎりにおいて右の「マルクスの規定」なるものは、法則的につねに妥当するものでなければならない。だから、④のうちの宇野氏自身の手になる文章は、ひとつ残らず、マルクスの叙述の完全な誤読と曲解、「価値規定」の核心的問題の見落し、歴史的な商品交換の論理的把握の無能力を具体的に示すものとなっている。

7 右のような誤読と曲解、見落し・錯乱、論理的思考の欠如をさらに一段とめざましく実証しているのは、⑤である。宇野氏は、④で引用した「マルクスの規定」についての氏自身の誤読と曲解を「補強」するために、マルクスの「ある人が怠惰または不熟練であればあるほど、……」という叙述部分を引用して、そのなかの「彼の商品はそれだけ価値が大きい、というように思われるかもしれない」という文句に着目して、これを「誤解」だと思いこみ、そこででもっともらしく、さきの「マルクスの規定」はこの「誤解に対して述べられているのである」と書いている。客観的にみれば、さきのマルクスの叙述が個別的労働と社会的労働との関連と「還元」の問題を論究したものだという「核心」を読みとることのできない者は、——もちろん宇野氏をふくめて——ことごとくかれら自身が右の「誤解」をそ

のまま犯さざるをえないことになっており、しかも、その「誤解」を犯しているということを覚ることすらできないという立場におのずからおかれていますのであるが、それにしても、「……」というように思われるかもしれない」という言葉から、それは「誤解」を示したものだという主張をうちだすとは、なんと無軌道な「原理論」的自惚れ屋であろうか！

同じ「補強」のためにさらに、⑤では、④に引用した「マルクスの規定」なるものについて、宇野氏は、そこでは「二つの問題」が「共に考えられているようである」として、「種々異った商品がその生産に要する労働時間によってその価値を決定されるという問題」と「同じ商品が人によってその生産に要する労働時間を異にする場合にも同一の価値規定を受けるという市場価値の問題」とをあげている。読者諸君は、わが「原理論」の始祖が明示しているこの「二つの問題」なるものをよくみていただきたい。こうした「御託宣」がさきのマルクスの叙述(④)についての始祖自身の「解釈」の正当性ではなく、まさにその底知れずの誤読と曲解を「補強」するものであることは、ただちにわかる。まず第一に、さきのマルクスの叙述は、ここに示された「二つの問題」とは完全に無縁である。マルクスは、「価値の実体」である「抽象的・人間的労働」の質的規定を究明しているのである。「生産に要する労働時間によって価値が決定される」などというような、質的規定を見落したたんなる「労働時間による価値規定」がおよそ問題になりえないことぐらい、ヘーゲルを借りなくとも、誰にでもすぐわかることである。第二に、「二つの問題」なるものは、文字面としては、一応文章にはなっているが、そのどちらも、完全に無内容の、しかも間違いだらけの空文句である。「第一の問題」の「種々異った商品がその生産に要する労働時間によってその価値を決定される」ということは、もっと正確に表現すれば、「鉄、小麦、綿布などそれぞれがった商品がそれぞれその生産に要する労働時間によってその価値を決定される」ということでしかなく、つ

まりは、「ある一商品、たとえば綿布は、その生産に要する労働時間によってその価値を決定される」ということである。ところで、「綿布」を生産する商品生産者は多数おり、「人によって綿布の生産に要する労働時間は必ずちがっている」のであるから、右のようにたんに「綿布の生産に要する労働時間でその価値を決定される」というだけの「主張」は、当然につきの二つの主張のうちのどちらかに帰着せざるをえない。つまり、綿布は、「人によって必要労働時間が異なるのであるから、その労働時間の大きさに応じて異なった価値をうけとる」という主張か、それとも、「人によって必要労働時間が異なっても、同じ大きさの価値をもつ」という主張か、である。さきの主張は、宇野氏自身がたったいま「誤解」だと一蹴したその当の「誤解」なるものと完全に同じものである。あとの主張は、氏のあげている「第二の問題」と完全に同じものである。要するに、宇野氏は、自分自身の並たてている「理論的」文章の意味が皆目わけわからないのである。第三、に、いずれにせよ、「一商品はその生産に要する労働時間でその価値が決定される」という主張は、徹徹頭尾誤りであって、これに「価値規定」という言葉を用いているのは、「価値規定」そのものについての完全な無理解と曲解をさらけ出すものでしかない。第四に、「同じ商品が人によってその生産に要する労働時間を異にする場合にも同一の価値規定をうける」という「第二の問題」を指して「市場価値の問題」だとし、「この問題については後に第三篇第一章で説明する」という注釈をつけているが、これはまた、「市場価値の問題」そのものについての完全に混乱した理解を示すものである。氏の主著の「第三篇第二章」とは、「分配論」の「第一章 利潤」であり、その内容は、誰にでも推察されるように、マルクスの『資本論』第三卷第十章「競争による一般的利潤率の平均化 市場価格と市場価値 超過利潤」を下敷きにしてこれを書き写しただけのものである。だが、それは、第三卷「資本主義的生産の総過程」をば氏が第三篇「分配論」として根本的に改ざんしてしまっている事実からもわかるように、第三卷第十章の内容を誤読と曲解とでなぞったまさに



ぬたくり絵ともいうべきものである。それにしても、第三卷第十章での主題が、その表題の示すように、「異なった部門のあいだでの資本の競争を通じての利潤率の平均化と、この平均化による市場価値規定」にあることぐらい、文字を読めるほどの者ならば誰にでもすぐわかる。これにたいして、マルクスの「価値規定」はといえば、それは経済理論体系のまさに「先頭に立つ」規定であって、そこではまだ「剰余価値規定」も「資本の競争」も全然問題にはなっていないし、それらはことごとく「捨象」されているのである。そしてまた、これらをすべて「捨象」しなければ、「先頭に立つ」「価値規定」も把握されえないのである。こうしてここでもまた、宇野氏は、「経済学の方法」についての完全な曲解、「理論展開」についての完全な無知をば重ねて「具体的に」実証してくれているのである。

8 第三の引用は、⑥にかかげられている「イギリスにおける蒸気織機採用の例」の叙述であるが、宇野氏は、これを「第二の市場価値の問題の例解」だと言っている。だが、このマルクスの叙述の中のどこを探しても、「資本の競争」も「利潤率」も見つけることはできない。さきに前稿で詳細に説明したように（本誌第二十九卷第一号、七三—七八ページ、参照）、マルクスは、「価値規定」の豊富な内容を明らかにするために、「生産諸条件」とくに生産手段—の社会的変化」の実例について説明しているのである。それゆえ、右のような宇野氏の主張は、おのずから、「近代的経済学が先頭に立てている」「価値規定」とずっとのちに展開されている「市場価値規定」とのちがいと関連を、氏自身感じとることすらできないものだということが、つまりは科学的理論を論ずる資格すらないものだということを、実証するものとなっている。ところが、逆立ちしている人間には物事はすべて逆さまに映らざるをえないのであって、宇野氏は、マルクスにむかって、「ここで説明すべき……第一の問題点は、それがために反って不明瞭となっている」などといった自己暴露的悪態をついているのである！

9 第四の引用は、「単純労働と複雑労働」との関連についての叙述である(7)が、宇野氏は、これに「これは種々異った生産条件のもとに生産された生産物が、商品として交換される場合にも、価値としては同質のものであるという、商品交換の一般的规定を述べるものにすぎない」といった「解説」をつけている。「種々異った生産条件のもとに生産された生産物が、商品として交換される場合」というのがびったりあてはまるのは、まさにさきの「イギリスでの蒸気織機採用の例」であって、その場合には、等質・等量の人間の労働が異なった量の商品価値を形成するのである。ところが、宇野氏は、「その場合に」は「価値としては同質のものである」と言う。この「価値としては同質のものである」という言葉ほど、論者の論理的錯乱を的確に示すものはすくない。<sup>(42)</sup>なぜならば、「価値」という概念は、当然に「同じ質」のものを指すからである。問題は、「価値の大きさ」の規定の上にこそあるのである。ところが、宇野氏は、右のトウトロギー的空文句を述べたあと、すぐさまこれについて、それは「商品交換の一般的规定」だと説明する。だが、この「商品交換の一般的规定」という言葉は、すぐ前の「商品として交換される場合にも」という副文章の中の言葉を拾いあつめてつくったものと思われるが、副文章の中の言葉を主文章の主格に仕立てあげるのは、純粹の論理的ベテンである。主文章の主語は「生産物」であり、その述語は「価値としては同質のものである」であり、主文章の意味は「生産物は、交換されよう」とされまいと、すでに商品としてそれ自身、同じ価値をもっている」ということである。それは、文字通り、「商品価値の規定」を述べたもので、「商品交換の一般的规定」などという、得体の知れないものは全く無縁である。それゆえ、右の宇野氏の「解説」は、ただただ氏自身の国語的理解力のほどを「具体的に展開して」みせただけのものとして意義をもっているのであって、こうした自己暴露的「解説」でマルクスの叙述に言いがかりをつけようというのは、もともとあだな望みというものである。

(42) この錯亂的トウトロギーは、⑨でもう一度念入りに「展開」された「命題」の形で述べられている。——「商品経済は、……あらゆる生産物に価値としての同質性を要請する」。だが、「商品経済」とはなにか？ それは、まさに「交換可能なあらゆる生産物がひとしく価値をもつものとして交換されるところの経済関係」である。だから、右の氣どった「命題」も、その実、「交換可能なあらゆる生産物が同じ価値をもつものとして交換されている商品経済は、あらゆる生産物に価値としての同質性を要請する」という、時間錯誤的トウトロギーでしかないのである。なお、右のような転倒した「同質性の要請」なるものを「根拠」として、宇野氏は、⑩で、「労働力の商品化による資本主義の発展」という言葉をもちだし、「そこではじめて右の要請が具体的に実現される」と述べているが、時間錯誤的トウトロギーは「資本主義の発展」でも救われようがないことは明らかである。

(43) この言いがかりは、早速つぎの⑧で述べたてられている。「価値の実体が労働によって形成せられるということ」は、「資本の生産過程そのもの」において「論証」すべきであるのに、マルクスは、「いわゆる商品生産一般」において「論証」しようとしたために、「複雑労働の単純労働への還元」も「生産者の背後で確定されるもの」とせざるをえない羽目におちいたのである、と。この言いがかりが、マルクスの叙述の致命的欠陥を明らかにしたものか、それとも、宇野氏自身の「原理論」的主張の致命的欠陥を明らかにしたものであるかは、簡単な検討ですぐわかる。「価値の実体」の確定が、「価値概念」の規定におけるもっとも基本的な中心部分をなすものであることは、いまさういうまでもない。「価値概念」の規定が、「近代経済学の先頭に立つ」もっとも基本的なものであり、したがって、そこでは、発展した資本の諸規定は当然に捨象されており、その意味で「単なる商品生産」の関係が前提されなければならないということは、「経済学の方法」に照らして、自明のことである。マルクスが『資本論』の冒頭においてなによりもさきに「価値概念」を「たんなる商品生産」の関係において説明しているのは、科学的にみて完全に正しいものである。だが、マルクスはそこで「価値概念」を明確にしているのであって、けっして「価値の実体」の「論証」などしてはいない。マルクスは、『資本論』の冒頭で「価値概念」を「論証」すべきだ、などと主張する議論はただ嘲笑に値するだけだと言っているのである。「原理論」的言いがかりの主はどうかといえば、このマルクスによって一蹴された「論証」ひとつに、けんめいにしがみついているのである。ところで、なにを「論証」せよといきまいているかとおもえば、「価値の実体が労働によって形成せられるということ」だそうである。「価値の実体」とは「価値を形成するもの」であり、「抽象的・人間的労働」にほかならないから、右の文句はその実、「価値を形成するものが、労働に

よって形成せられるということ」という真に名状したいトウトロギー的空文句でしかないことがわかる。マルクスによる「嘲笑」は別としても、こういう空文句をけんめいに唱えているような御仁が、「論証」の能力をこれっぽっちもっていないであろうことは誰の眼にも明らかである。ところで、右の「論証」という空文句にひっかけて、宇野氏は、「マルクスは、そのために、複雑労働の単純労働への還元をも生産者の背後で確定されるものとせざるをえなくなった」のだと述べたてている。つまり、右の「還元」が「一つの社会的過程によって、生産者の背後で確定され、したがって生産者にとっては慣習によって与えられたもののように思われる」というマルクスの説明は誤りだ、といっているのである。では、「原理論」専門の大先生におうかがいするが、いったい、右の「還元」は、どこで、どのようにおこなわれていると説明すべきだというのか？

「還元」が「生産者の背後で確定される」というところにけちをつけているのであるから、「生産者の背後」ではなく、「生産者の面前で」か、あるいは「資本家や労働者の見ているところで」、それも、もちろん「一つの社会的過程によって」ではなく、資本家個人の胸先き三寸で計算されて——それとも資本家全体の共同謀議で定められて——いる、といわなければならぬが、いったい、どなた様の面前で、どなた様がおきめになる、と宇野氏は言うのであるか？ ところが、あきれたことに、わが大先生は「原理論」の大家だけあって、「還元」についての「正しい」説明をはこれっぽっちもあたえていないのである。おしゃカ様でもできない「還元」の仕方を、まるでできるもののように「匂わせ」ながら、そうすることはできませず、やりもしないで、ただ、マルクスの説明——それも唯一の正しい説明——にけちのつけっぱなしとは、また、なんと見下げはてた「原理論」大家であろうか！

10 ⑩のはじめにある第五の引用は、『資本論』第一巻第一章第二節の中の「抽象的・人間的労働」なるものの説明にあてられた部分からのものである。宇野氏は、さきに指摘したように、『経済学批判』の『序説』の「3 経済学の方法」のなかの「労働一般」にかんする叙述部分を念頭におき、「労働一般」——「特定の労働にたいする無関心」——「労働の形態転換」による「無視」——「商品体の使用価値の捨象」——「資本主義社会ではじめて具体的に展開」——「資本の生産過程における労働価値説の論証」といった、「理論的」つづり、あわせを考え、この中の最後の「目標」に到達す

るための「媒介項」として重要な『労働の形態転換』による『無視』をいわば「強化・補強」するものとして、この引用をにかけているのである。そして、そのために、ことさらこの引用部分のすぐ前におかれた叙述部分を削除して、もっぱら「労働の形態転換」という言葉を強く印象づけるように配慮しているが、これはきわめて意図的に改ざんを指摘したものといつてよい。第一章第二節は、マルクスがすでに第一節で「価値の実体」を究明するさいに明らかにした「労働の二面性」について、その的確な把握が「価値概念」のみならず「経済学全体の理解にとって決定的な要め」であることを強調して、この「要め」の基本的内容を改めて十分正確に説明しておくためにおいているものである。誰にでも容易に理解される「具体的労働」の内容をはじめに説明したマルクスは、ついで難解な「抽象的・人間的労働」の意味を理解させるために、二商品、上衣とリンネルとをあげ、まず「価値としては、上衣とリンネルとは、同じ実体から成る物であり、同等な種類の労働の客体的表現である」（前出、四八ページ、傍点はインスティトゥ版のもの）と述べ、ついで「同じ実体」、「同等な種類の労働」とは、いったい、どういうものか、二商品をつくり出す「裁縫労働と織物労働とは質的に異なった労働である」にもかかわらず、「同等な種類の労働」だなどということはどうして言えるのかということ、つぎのように説明しているのである。

「とはいえ、つぎのような社会状態もあるものだ。そこでは、同じ人間がこもこも裁縫をしたり織物を織ったりしているのであつて、それゆえに、この二つの相異なった労働様式は、ただ同じ個人の労働の諸変形でしかなく、まだ別々の諸個人の特殊な固定した諸機能になっていないのであつて、それはちょうどわれわれの仕立屋が今日つくる上衣もかれが明日つくるズボンも、ただ同じ個人の労働の諸変形を前提しているにすぎないようなものである。さらに一見してわかるように、われわれの資本主義社会では、労働需要の方向の変化にしたがつて、人間的労働の一定の部分

が、こもこもあるときは裁縫労働の形態で、あるときは織物労働の形態で供給される。このような労働の形態変換は、摩擦なしにはすまないかもしれないが、とにかくそれはおこなわれなければならない。生産的労働の規定性、したがってまた労働の有用的性格を度外視するとすれば、労働に残るものは、それが人間の労働力の支出である、ということである。裁縫労働と織物労働とは、質的に相異なつた生産的活動であるとはいへ、両方とも人間の脳髓、筋肉、神経、手などの生産的支出であり、この意味で両方とも人間の労働である。それらは、ただ、人間の労働力を支出するための二つの違った形態でしかない」（前出、四八―四九ページ、傍点はインスティットウト版のもの）。

みられるように、同じ個人の人間の労働力であれ、同じ三十万の労働者の担っている人間の労働力であれ、それが裁縫労働および織物労働に支出されているという事実、そのものが、すでに、裁縫労働と織物労働とは、同じ人間の労働力の支出の形態のちがいをあらわすにすぎず、両方とも、同じ人間の労働力の支出そのものとしては、まったく変わりが無い、つまり同じ抽象的・人間的労働である、ということを示しているのである。この事実を論理的に表現すれば、「労働の具体的形態を捨象すれば、またはそれを度外視すれば、そこに残るのは抽象的・人間的労働である」という命題になる。こうして、マルクスは、最後に、「それらは、ただ人間の労働力を支出するための二つの違った形態でしかない」と述べ、抽象的・人間的労働と具体的労働とのかかわりを、つまり「労働の二面性」そのものを明らかにしているのである。ところが、第一章第二節の表題そのものも、また第二節の冒頭のマルクスの強調した文字もその眼の中に入らない「原理論」の大家は、必要不可欠の前文をすべて削りとって、もっぱら「労働の有用的性格を度外視すれば」という一句だけに眼をつけて、この「度外視」は「交換関係における交換としての『無視』を意味するものだ」といった、まったく見当ちがいの「解釈」をひねりだし、おまけにこの「解釈」をむりやりマルクスにおしつ

けて「それならば、なお『労働に残るもの』が『人間的労働力の支出』であるとしても、その根拠を明確にするものとはいえない」などといった、おどろくべきいいがかりを弄しているのである。いったい、「交換関係における交換としての『無視』」などという空文句が、右のマルクスの説明とどんな関連があるというのか？ マルクスの説明のどこに、「交換関係」とか「交換」にふれたものがあるというのか？ マルクスのあげている「同じ人間がこもこも裁縫したり織物を織ったりしている」「社会状態」が、「交換関係」とか「交換」とかとはおよそ無縁の「社会」を指しているということ、このことを読みとれないような人間が、ひとりでもいるだろうか？ マルクスが言いもしないし書いてもない「主張」をマルクスの叙述の中に発見するという特異の才能に恵まれた大先生は、右の説明のなかにたちまち「交換関係における交換としての『無視』」という言葉、「見つけた」ものであるが、この言葉そのものの意味はしかとお考えにならないかったようである。正常な国語的解釈によれば、右の言葉の内容は、「交換ということそのことがとりもおさず『無視』ということを意味する」ということである。では、「交換関係」においてはなにが「無視」されるというのか？ 宇野氏は「労働の有用的性格が無視される」という文句を「手ざわよく」これに結びつけている。つまり「商品の使用価値が『無視』される」というのである。だが、そもそも、「商品の使用価値が『無視』され」て商品の「交換関係」そのものが成り立つであろうか？ 「交換関係」という現実的過程ではなく、ただ商品価値を「観念的に表示する」だけの「価値表現」・「価値形態」の問題においてさえ、「商品所有者の欲望」つまり「商品の社会的使用価値」を「無視」することは断じて許されないという、特異の「主張」をふりまわしていたのは、どこの誰であつたろうか！？

また、「その根拠を明確にするものとはいえない」という言いがかりも、いつものことながら、賞められたものではない。「同じひとりの人間が、同じ三十万の労働者が、こもこも裁縫をしたり織物を織ったりしている」という事実、そ

のものがすでに、同じ人間的労働力の支出そのものとその支出の形態との必然的結びつきを客観的に示しているのであって、この事実のなかに「労働の二面性」という大真理を発見するためには、正常な論理的思考以外になにも必要としない。これにたいして、「その根拠を明確にせよ」などという言いがかりをつけるのは、「価値概念を論証すべきだ」といつてマルクスの嘲笑を買った手合と同じ部類の俗物でしかないことを「具体的」に示すものといつてよい。

さて、以上のようにして、マルクスの叙述からの五つの引用個所についての意図的な曲解とこじつけを積み重ね、最後の引用個所の中の「労働の形態転換」という言葉をもっとも有力な「テコ」として、宇野氏は、さきにあげておいた「商品体の使用価値の捨象」——「労働の形態転換」による『無視』——「資本主義社会ではじめて具体的・全面的に展開」という予定の「筋道」、つまりつづり、合せにしたがって、首尾よく「労働価値説の論証は、マルクスの方法ではだめで、資本の生産過程においてこそなされるべきである」(15) という「御託宣」に到達することに相成るのであって、(13)と(14)とは、そのあいだの「つなぎ」としておかれているのであるが、「商品の価値が労働によって形成されるものであることを明らかにするものとなる」(14)という文句ひとつでよくわかるように、それらは、とうてい論理的「つなぎ」になりうるものではなく、精々のところ、空間的「つなぎ」としてしか意味をなさないものとなっているのである。

そこで、以上の簡単な検討を通じて明確に浮び上ってきた事実をつぎに摘記しておく。

Ⅰ 宇野氏の主張する「労働価値説」は、「商品の価値が労働によって形成されるものであることを明かにするもの」(14)であって、いまだ二世紀もむかしのA・スミスの「労働価値説」と完全に一致したものである。このようなスミス式「労働価値説」の堅持・固執は、「価値の実体としての労働」という文句の再三再四のくりかえし、およびマルクス経済理論の精髓の一つである「労働の二面性」の理解の完全な欠落とかく結びつき、相互に規定しあっている。だか



ら、この骨の髄からのスミス式「労働価値説」の信奉者が、その主著の「序」のなかで、ことさら「古典経済学を徹底的に批判して確立されたマルクス経済学を描いて、経済学の基本的概念は得られるものではない」と書きたてているのは、たんにためにする、誇大宣伝であり、きわめて悪質なペテンといわなければならない。

□ 宇野氏は、「経済学の方法」という文字をよくつかって、いかにも『経済学批判』の『序説』の「3 経済学の方法」の内容を完全に把握しているかのようなポーズをみせているが、その実、その内容をほんのこれっぽちも理解するどころか、これと真っ向うから対立する主張を臆面もなくあれこれとひけらかしているのであって、こうした「論理」と「国語」とのいわば全面的な「無視」を無限に展開している世紀的人物にたいして、「概念的展開」とはどういうものかということについての説明を期待するのははじめからできない相談なのである。

ハ マルクスが考えもせず書きもしないことをマルクスの著作の中に「発見」という、まさにマルクスそのひとを驚倒させないではおかない特異の「眼力」と「理解力」とを、これほど無尽蔵にもっている人物は、いまだかつていなかったといつてよい。いまから八十年ほどむかし、マルクスの盟友エンゲルスは、ニューヨークのドクトル・ステイーベリングにたいして、「科学的な問題にたずさわろうとする人は、なによりもまず、自分が利用しようとする書物をその著者が書いたとおりに読むこと、またことに、そこに書いてないことを読みこまないようにすることを学ばなければならない」(『資本論』第三巻の「序文」、前出、第三巻、二二—二三ページ)という「忠告」をあたえたが、これは、先入観なしに問題解決に取り組んだドクトルの「善意」にただしくこたえたものといえる。だが、曲解、詭弁、言いがかり、論理的錯乱といかさまの徹底的駆使という、わが宇野氏の世紀的才能に照らしてみると、氏にたいしてもっともふさわしい「讃辞」として捧げられるべきは、まさしく同じ才能の傑出した持主として『資本論』の中に

永久にその名をとどめているアキレ・ロリア氏にエンゲルスが献呈したつぎの「讃辞」でなければならぬ。——  
「どたん場にくると鰻のようにすべり抜けることを心得ている底なしの図々しさ、受けた足蹴にたいする英雄的な無視、他人の功績のすばやい横取り、押しの強い山師的広告、一味徒党による売名組織」（前出、第三卷、二二ページ）。

（三）

さてつぎに、肝腎の主題である「価値法則」という言葉の意味を宇野氏がどのように理解しているかということが問題となるが、残念ながら、氏の主著のなかには「価値法則とはなにか？」という問いにたいする端的で明確な解答は、ひとつとして示されていない。そこで、やむをえず、われわれは、「価値法則」についての氏の理解を比較的小く示しているとおもわれる箇所を主著の中から適宜抽出し、それらについて簡単な考察を加えてみることにしよう（①、②……および段落、傍点とゴシック体は、のちの検討の便宜のため山本のつけたもの）。

「①かくしてまたあらゆる生産物がその生産に要する労働時間によってえられるという労働生産過程の一般的原则は、商品経済の下にあっては、その交換の基準としての価値法則としてあらわれる」（五五ページ）。

「②個々の資本は、それぞれの価値増殖を目標として、価格の変動によって、規制せられながら、社会的需要に応ずることになるのである。……③それはまた全社会の労働力を生産手段と共に、それぞれの生産物に必要とせられる程度に応じて配分することによって、年々の再生産を継続するという、経済生活の合理的処理に当然なる、いわばあらゆる社会に共通なる経済の原則を、商品形態をもって行うものにはかならない。④資本家的商品経済は、それを価格の運動によって調整せられつつ貫徹される価値法則によって実現するのである。⑤すなわち個々の生産物の生産に必要な労働時間を基準にして、全社会のその生産物に対する需要に応じて、資本は労働力と生産手段とをそれぞれの生産に投ずることになる」（一一六ページ）。

「⑥勿論、これらの簡単なる数字による表式は、単に単純再生産並に拡張再生産のあらゆる社会に通ずる基本的条件を資本主義社会も商品形態をもって実現するものであることを示すにすぎない。……表式は、たとい如何に複雑な数字をもってしても、

そういうあらゆる再生産の諸条件とその変化を示しうるものではない。ただかかる複雑なる諸条件をも資本は、上述の基本的条件を基準にして、その生産物価格の変動によつて規制せられつつ充足し、年々の生産に必要な生産手段と消費資料との生産に、生産手段と労働力とを配分するのである。

⑦勿論、個々の資本にとっては、したがってまた労働者にとつても、この社会的な経済原則は、価格の運動の内にあらわれる価値法則としてあらわれ、個人的な利害関係をもつて強制せられるものにほかならない。過剰に生産されたものは価格の低落をもつてその生産の縮小を強制せられ、不足する生産物は価格の騰貴によつてその生産の拡張を誘導される。

⑧それはいうまでもなく個々の生産物の生産に要する労働時間が社会的基準によつて規制せられることを基礎とするものである。

⑨元々、商品経済を規制する価値法則なるものは、マルクスもいうように『単に各個の商品についてただ必要労働時間だけが費やされているばかりでなく、社会的総労働時間のうちからその必要比例量だけが種々なる群に費やされているという。』(『資本論』第三卷「イ」六六五頁) ように規制するものであつて、それはまたあらゆる社会に通ずる経済の原則を根拠として社会的法則となるのである。

⑩表式に示される第一部門と第二部門との関係も、そういう価値法則による均衡関係を示すものである(二二五—二二六ページ、但し、第三卷「イ」六六五頁とあるは、六八五頁の誤記—山本)。

⑪勿論、資本主義的商品経済は、理論的に想定される純粹の資本主義社会においても、表式に示されるような均衡関係は、価格の運動の中心をなすものとして成立するものにすぎない。個々の資本の、いわゆる無政府的な生産と蓄積とが、価値法則によつて規制せられるとしても、かかる均衡関係をそのままに実現するものとは、理論的にもいえない。理論的想定自身も、そういう無政府の生産の内に法則の貫徹を証明しようというものである。……………⑫個々の資本としては無政府的に、しかし価値法則によつていわば外部から支配されて行動することにはなるが、この価値法則による規制は、社会的にはこのあらゆる社会に通ずる経済原則を実現するものとなるのである。

⑬商品経済の法則は、決して経済原則をその外部に有するものではない。価格の運動という特有の形態をもつてではあるが、社会的に自らかかる原則を実現するのである。価値法則の法則性もそこに根拠を有している。(二二七ページ)。

⑭価値の生産価格への転化は、しかし価値の変動を直接に表わさなくなるばかりではない。その商品の生産には何等の変化のない場合にも、他の商品の生産にあたる資本に、その構成あるいは回転期間に変化をもたらずような、生産方法の変化があれば、多かれ少かれその生産価格に変動を受けざるをえない。一般の利潤率自身に変化するのである。……………いずれにしても、これらはすべて労働の生産物が資本の生産物として、商品交換されるということに基づく価値法則の展開である。……………

⑤生産価格の運動は、かくの如く価値法則をそのままに展開するとはいえないが、しかし商品経済を支配する価値法則は、むしろこの資本の生産物において、したがってまた価値の生産価格化によって始めて、いわばその実現の機構を確立され、全面的に貫徹されることになる。⑥全社会の需要する種々なる使用価値が、その個々の生産に要する労働時間を前提とし、それに基いて、それぞれの量において生産されるということが、利潤率を通して客観的に規制せられるのである。⑦資本は、それによって各種の生産物の生産に社会的総労働の均衡をえた配分をなすわけであるが、労働力の商品化がそれを可能ならしめるのである」（一五二—一五二ページおよび一五四ページ）。

「近代的経済学の先頭に立つ」もっとも基本的な「価値概念」とりわけ「価値規定」についての宇野氏の理解がどのようなものであるかということは、これまでの検討によってすでに十分過ぎるほど十分に明らかとなった。それはさきのまとめに記されているように、とうてい理解などといえたものではなく、徹頭徹尾誤解と曲解、当て推量とこじつけの寄せあつめとしかいいようのないものである。「価値規定」の理解の欠如は、そのまま、「価値法則」の理解の欠如を意味する。そこで、「概念の欠如するところそこに必ず空文句がやってくる」の「法則」の貫徹により、「価値法則」の正確・簡潔な説明に代って、「価値法則」という文字に関連のありそうな叙述部分をあさり、これらを適当にあしらって「理論的」文章をつくりあげ、「以上が価値法則の内容の説明である」といった宣伝をすることになる。こうした論者の「作文」のたねとして用いられているのは、きまつてつぎの二つであるといつてよい。そのひとつは、「交換において商品の価格が価値に一致することが価値法則の貫徹である」という皮相でまちがった、しかし一般に信奉されている「議論」であり、他のひとつは、まえにふれたマルクスのクーゲルマンあての手紙（一八六八年七月十一日付）である。さきのたねがまったく混乱した「法則」観にもとづいていることは明らかであるが、しかしこの種の「議論」はさまざまな形をとって経済理論の各分野にひろくはびこっている。ここにかかげた宇野氏の主張のひとつ、

『交換の基準としての価値法則』(①) もこの範疇に入るものといつてよい。この文句は、「価値法則とはなにか」を明らかにするものではけつてない。「価値法則が交換の基準となっている」という文章では、価値法則の内容は示されない。むしろ「商品価値が交換の基準となっている」、つまり「交換の基準としての価値」という文句のほうが、ずっと合理的である。②以下は、あらかじめ上記のマルクスの手紙を「内奥の根拠」、つまりねたとしてみるとみてよいが、しかし、曲解とこじつけないしは改ざんの全面的展開といういつもの「法則」貫徹を念頭におくとき、②以下の中味の検討の前に、問題の手紙に眼を通し、その重要な意味内容をしかと見定めておくことが必要かつ適切とおもわれる。つきにかかげるのは、この手紙のうちの、当面の問題に関連すると考えられる部分である(……は省略部分)。

『ツェントラールブラット』のほうはどうかと言いますと、この男にできる最大限の譲歩とは、およそ価値なるものを想定するならば、わたしの結論を認めざるをえない、と認めることなのです。かわいそうにこの男には、もしわたしの本に「価値」にかんする章が一章もないとしても、わたしがやってみせた現実の諸関係の分析が、現実の価値諸関係の証明と実証をふくむことになるという点がわからないのです。価値概念を証明する必要がある、などというおしゃべりができるのは、問題とされている事柄についても、また科学の方法についても、これ以上はないほど完全に無知だからにほかなりません。<sup>(44)</sup> どんな国民でも、一年はおろか、二、三週間でも労働を停止しようものなら、くたばってしまうことは、どんな子供でも知っています。どんな子供でも知っているとせば、つぎのことにしてもそうです。すなわち、それぞれの欲望の量に応じる生産物の量には、社会的総労働のそれぞれ一定の量が必要だ、ということなのです。社会的労働をこのように一定の割合に配分することの必要性は、社会的生産の確定された形態によってなくなるものではなく、ただその現われ方を変えるだけのことというのも、自明のところなのです。自然の諸法則とい

うのはなくすることができないものです。歴史的にさまざまな状態のなかで変わりうるものは、それらの法則が貫徹されていく形態だけなのです。そして社会的労働の連関が個々人の労働生産物の私的交換をその特徴としているような社会状態で、この労働の一定の割合での配分が貫徹される形態こそが、これらの生産物の交換価値にほかならないのです。

価値法則がどのように貫徹されていくかを展開することのうちにこそ、科学はあるのです。だから最初から、この法則に矛盾するように見える諸現象を説明しようとすれば、科学以前の科学を持ち出さなければならぬことになるでしょう。リカードの誤りはまさに、彼が価値について論じている第一章で、まず展開されなければならない、ありとあらゆる範疇を、与えられたものと前提し、これらの範疇が価値法則に適合していることを証明しようとしたことにあるのです。

.....

俗流経済学というのは、現実の、日々の交換価値と価値量とが、直接には同一ではありえないということに、すこしも気がつかない者のことです。ブルジョア社会というのはまさに先験的に生産の意識的な社会的規制がまったく行われぬような社会のことではありませんか。理性的なものや自然必然的なものは、盲目的に作用する平均としてしか貫徹されないのです。そういうわけで、俗流経済学者は、内的関連の暴露にたいして、現象面では事態がちがうではないかと言いつのって、大発見でもしたような気になるのです。これはじつさいには、仮象にしがみつき、これを究極のものである、と言いつのっているのと同じことなのです。それでは、いったい、なんのために科学がいるのです。

しかし、この問題にはもうひとつ別の背景があります。連関が洞察されるときに、実践上の崩壊に先きだつて、現存の状態は永遠の必然性をもっているという理論上の信仰はすべてついえ去ります。だから無思想の混乱をいつまでも残しておくことこそ、ここでは支配階級の絶対の利益なのです。学問のうえで最後の奥の手といえば、経済学では決して考えたりしてはならないのだ、という言い草しか知らないような、誹謗を生業とするおしゃべりすずめたちを、金を払ってまで養っているのは、それ以外になんのためでしょうか！

いや、もうたくさん、たくさんです。とにかく、こういうブルジョアジーの坊主どもがどこまでおちぶれているか、労働者や、工場主、商人たちまでもがわたしの本を理解し、その筋道がわかったというのに、この「訓誥学者（一）」たちは、わたしが勝手にわけのわからないことを言っているなどと弱音を吐いているところを見てもはつきりしています」（マルクス・エンゲルス全集、第三十二巻、五五二—五五三ページ、傍点—マルクス）。

(44) みられるように、ここに出てくる「かわいそうな男」についてのマルクスの指摘は、この「かわいそうな男」よりもずっと精力的に「価値概念を論証すべきである」という「おしゃべり」をくりかえし、これを当のマルクスにたいして「要求」してやまないわが「原理論」の大家に、まさにうってつけのものである。「問題とされている事柄」についても、また「科学の方法」についても「これ以上はないほど完全に無知である」という的確な「本質規定」が右の歴史的人物とならんでわが「原理論」の大家に完全に妥当することも、これまでの検討によってすでにあますところなく実証されているといつてよい。

右の手紙のうちで当面の問題に関係のあるのは、いうまでもなく、「どんな国民でも」にはじまる文章とそれ以下の部分である。マルクスは、そこで、社会が存続するためにはまず「社会的労働がおこなわれなければならない」と、および「それぞれの欲望充足に必要な生産物量を生産するためには、社会的総労働をそれぞれ一定の割合に配分しなければならない」ということは、「すべての社会を通ずる社会的自然法則」であることを指摘し、この超歴史的な

社会的自然法則は、各歴史的社会においては、それぞれ特有の「現われ方」「形態」をとって貫徹されること、私的所有にもとづく私的労働の社会、つまり商品生産社会では、右の超歴史的な社会的自然法則の「貫徹する形態」こそが、まさに「生産物の交換価値」であることを明らかにしているのである。ところが、このマルクスの手紙を有力な「根拠」として独自の「価値法則論」をうちたてようとはかる論者は、この「生産物の交換価値」という文字がその目に入らないで、すぐつぎに出ている「価値法則」という文字だけがその目に映るらしく、これを「生産物の交換価値」の代わりに据えて、つぎのような「命題」をマルクスが主張しているものと思ひこむのがつねのようである。

——「社会的総労働を一定の割合で配分しなければならないという社会的自然法則が商品生産社会において貫徹される形態、それがまさに価値法則である」。ところが、つぎに出てくる文章は、「価値法則がどのように貫徹されていくかを展開することのうちにこそ、科学はあるのです」であって、ここでの問題は、「価値法則」そのものの「貫徹する」形態、その現われ方を概念的に正しく「展開する」ことにある。だから、同じく「法則がそれ自身を貫徹する形態」だとはいっても、それらの内容は根本的にちがうのである。さきの場合の「法則」は「どんな子供でも知っている」ところの「超歴史的な社会的自然法則」であるが、あとの場合は、骨の折れる科学的洞察によつてはじめて把握される場所の商品生産社会に特有の「歴史的な社会的自然法則」である。「法則がそれ自身を貫徹する形態」にしても、さきの場合、誰の目にも容易にとらえることのできる「交換価値」であり、それは、いいかえれば、われわれの目の前で現実にあらわれている「価格」とその「変動」である。これにひきかえ、あとの場合には、「価値法則がそれ自身を貫徹する形態」は、きわめて複雑・多岐であつてこれをとらえることは容易ではない。われわれは、これらの諸現象形態のそれぞれについて正しく分析し、それらの内的な関連をとらえ、それらの奥にあるもつとも基底的な「本質」



「法則」を把握し、さらにこのもっとも基底的な「本質」に法則から出発してしだいに諸規定をただしく加えることによって、正しい関連のもとにその「本質」に法則の必然的な諸現象形態を展開していき、最後にわれわれの眼の前にある諸現象にまでたちもどらなければならないのであって、このことのためには、正しい論理的抽象と弁証法的思考による正確な科学的分析が要求されるのである。しかも、この最後に到達するもっとも具体的な諸現象形態にあっては、もっとも基底的な「本質」に法則はそのままの形で、それと容易にわかるような形であられるところか、それらは完全に隠蔽されてしまい、むしろ、「本質」に法則と直接相反するか、もしくはこれと矛盾するような現象形態となっているのである。

では、右のマルクスの手紙の中の、一方の「超歴史的な社会的自然法則」に「社会的総労働を一定の割合で配分しなければならぬという法則」とその「貫徹される形態」に「現われ方」と、他方の「歴史的な社会的自然法則」に「価値法則」とその「貫徹される形態」に「現われ方」とのあいだには、いったい、どのような関連があるのであるか、また、マルクスはそこにどのような関連をとらえて右のような文章を綴ったものであろうか？——ここにこそ、われわれが真剣に取り組まなければならない問題があるのであって、それを解く鍵は、まさに「交換価値」というマルクスの明示している言葉にあると考えられるのである。

いうまでもなく、「交換価値」は「価値」に「本質」の必然的な現象形態であり、「交換価値の大きさとその運動」は「本質」としての「価値法則」の必然的な現象形態であるが、このことは、真に「科学の方法」を体得しこれを完璧に駆使することのできたマルクスによつてはじめて発見され確立されたものである。この「交換価値」は、現実になれわれの眼の前では、「市場価格」という形をとってあらわれているが、もっとも基底的な「本質」としての「価

値」からこの現実の、もっとも具体的な現象形態である「市場価格」までの「展開過程」を正しくとらえることはきわめて困難であって、この「展開過程」を正しく把握するところにはじめて科学が成り立つ。これと同様に、もっとも基底的な「本質」としての「価値法則」がもっとも具体的な現象形態である「市場価格の大きさとその変動」としてあらわれるまでの「展開過程」も同じく科学的方法によつてはじめて明らかにされうる。だが、この「価値」と「価値法則」とは別々のものではなく、むしろ、「価値」が「社会的労働」の「社会的な質的規定」を示したものとすれば、「価値法則」はこの「質的規定」とかたく結びつき、この「質的規定」にもとづいて把握される、同じ「社会的労働」の「量的規定」を示したものである、とすることができ。それゆゑ、「価値」の「市場価格」にいたる展開過程と、「価値法則」の「市場価格の大きさとその運動」にいたる「展開過程」とは、いわば相對應する「展開過程」を表わしているともいいうるのである。一般に「量的規定」をとまなわなない「質的規定」はありえないし、また「質的規定」のないところに「量的規定」はありえないのであって、むしろ両者は一体を成しているといふべきなのである。<sup>(45)</sup>したがつて、「価値法則がどのように貫徹されていくかを展開する」ということのうちには、当然に、「質的規定」としての「価値」の「市場価格」への「展開」がふくまれており、前者は後者を基本とし、またこれとかたく結びつき、一体を成しているものだということを明確にとらえていなければならないのであって、そうでなければ前者の「展開過程」はとうてい正しく把握されることはできない。以上によつて、右の手紙の中でマルクスがリカードの「価値論」を批判して、もっとも基底的・抽象的な「本質」である「価値」から出発して、論理必然的にこれに正しく諸規定を加えていってより具体的な諸形態、たとえば利潤または生産価格のような「発展」した諸範疇を「展開」していかなければならないのに、そうした科学的方法に背いて、その理論展開の出発点においてはやくもこれらの諸形態

諸範疇を前提してしまい、それによってただこれらの範疇が「価値法則」に「適合」していることを証明しようとしているのは誤りであった、と述べているのは、まさしく、右のような理由によるのである。たとえば「生産価格の法則」は、現象的には、「価値法則」に「適合」するどころか、これと真つ向うから矛盾したものとしてみえられていたのであって、リカードの理論がそのそもその出発点。「価値論」においてはやくも「つまずく」ことをよぎなくされたのは、ひとえに右のような科学の方法。「経済学の方法」を理解しえず、したがってこの方法にしたがって、正しく「理論展開」を進めることが不可能であったからなのである。

(45) ここで念のため申しそえておくならば、マルクスが『資本論』第一巻第一章第一節においてまず「価値の実体」を究明し、ついでここからだちに「価値規定」＝「価値法則」を明らかにしているのは、「価値」についてまず第一に「質的规定」を明確にし、ついでこれとの結びつきでその「量的規定」を説明しているものであって、これによって「近代的经济学が先頭に立てている」もっとも基底的・抽象的な「価値概念」がはじめて十分な形において把握され確立されたのである。このような、「質的规定」と「量的規定」とのいわば統一としての「価値概念」こそ、まさに科学的経済学の「出发点」を形成するものといふことができるのである。だから、こうした科学的理論の真髓がわけわからず、「価値の実体は労働である」といったスミス式「労働価値説」をマルクスにおしつけたり、「価値法則」は、科学的な「価値概念」の基本的内容を成しているものであることがわからずに、これを「価値概念」からひきはなしてたんなる「均衡法則」に結びつけたり、等々している論者は、科学の方法にたいする無知と無理解、スミス、リカードより劣る俗物的観点の固執という、論者自身の「性格規定」を具体的に実証するものといわなければならない。

右のような事情をはっきりとらえるならば、マルクスがその手紙の中であげている二つの「超歴史的な社会的自然法則」も、マルクスがはじめて確立した科学的な「価値概念」に正しく結びつけて把握することができるし、またそうした関連においてこれを把握することが必要であると考えられる。すなわち、はじめの「どんな国民でも、一年はおろか、二、三週間でも労働を停止しようものなら、くたばってしまう」というのは、「価値の質的规定」、つまり「価値の実体」としての「抽象的・

人間の労働」という、いわば「歴史的な社会的自然法則」に対応するものであり、「それぞれの欲望の量に應じる生産物の量には、社会的総労働のそれぞれの一定の量が必要だ」というのは、「価値」の「量的規定」つまり、「価値の大きさの規定」としての「価値法則」という、同じく「歴史的な社会的自然法則」に対応するものである。このようにして、マルクスは、商品生産社会における「労働」の「質的规定」と「量的規定」との「統一」としての「価値概念」を明確に念頭におき、これとの対応関係において、きわめてわかりやすく、「超歴史的な社会的自然法則」の二つの面を説いたものと考えられるのである。つまり、ここにあげたマルクスのわかりやすい、「どんな子供でも知っている」基本的な「法則」の説明は、マルクスがはじめて解明し確立したところの「価値概念」についてその一般的な社会的「基礎」をきわめて明確に示したものであって、この意味からして、マルクスがこの「どんな子供にもわかる」二つの事柄をあげているのは、科学的な「価値概念」を真に正しく把握するためのきわめて要領をえた「手ほどき」を示しているものだ、ということができる。このような観点に立ってみると、いまからおよそ七十年前も前にレーニンが、マルクスの「クーゲルマンへの手紙」のロシア語訳への『序文』の中で、右のマルクスの手紙をとりあげて、つぎのように述べているのは、このうえもなく適切であり、レーニンがいかにマルクスの理論を的確に理解しこれを正しく継承し発展させることのできた、真に傑出した革命的マルクス主義者であったかということ、動かしがたく示しているものといわなければならないのである。

「マルクス主義をいっそう完全にまた深く会得する見地からみてひじょうに興味があるのは、一八六八年七月十一日の手紙である。マルクスはここで、俗流経済学者にたいする論戦批評の形で、いわゆる「労働」価値説についての自身の見解を、きわめて明瞭に述べている。マルクスの価値学説にたいする反対論のうち、『資本論』のもっとも素養に乏しい読者のごく自然に思いつくような、したがってまた「教授ふうの」ブルジョア「科学」の月なみの代表者たちをもっとも熱心にとりあげているような、ほかならぬそういう反対論が、ここでマルクスによって、簡潔に、あっさり、いちじるしく明瞭に分析されている。マルクスはここで、価値法則を説明するにあたって彼がどんな道をとったか、またどんな道をとらなければならないか、を示している。彼は、もっともありきたりの反対論を例にとつて、彼自信の方法を教えている。彼は、価値論のような純粹に（一見したところ）理論的で抽象的な問題と、「混乱を永久化する」ことを必要とする「支配階級の利益」との結びつきを、明らかにしている。マルクスを研究し『資本論』を読みはじめようとする人はだれでも、『資本論』のもっとも困難な初めの数章を学ぶのといっしょに、上記の手紙を読み、また読みかえすことがのぞましい」（全集第四版、第十二巻、八四ページ、

傍点—レーニン、ゴシック体—山本。

ところで、「価値法則」に坎する宇野氏の所論の検討にうつるまえに、われわれは、いまひとつ、「価値法則」の意義についての確な説明をあたえているマルクスの叙述部分を、『資本論』第一卷第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」のなかからとりだしてかかげおかなければならない。それは、宇野氏がさきにあげた「価値法則」に坎するさまざまな「主張」をつくりあげるにあたつては、おそらく、この叙述部分が、さきのマルクスの手紙とならんて、その重要な「材料」として役立てられたものであらうことが十分にうかがわれるからであり、したがつて、さきのマルクスの手紙の内容の正確な理解とならんて、この叙述部分の真実の意味内容をただしくとらえることをあらかじめなしとげておくならば、宇野氏の「価値法則」に坎するさまざまな「主張」の「出来栄え」とそれらの基本的な「性格」とは比較的簡単にこれをとらえることができ、これによつて、細部にわたる吟味の手数を省くことも可能になるものと考えられるからである。マルクスは、第一章第四節の前半で「商品の物神的性格とその秘密」を解明したあと、後半では商品生産者が必然的にこの「商品の物神的性格」によつていかに支配されふりまわされるかということを追究しているのであるが、そのなかで、

「生産物交換者たちがまず第一に實際に関心をもつのは、自分の生産物とひきかえにどれだけの他人の生産物が得られるか、つまり、生産物がどんな比率で交換されるか、という問題である。この割合がある程度の慣習的固定性をもつまでに成熟してくれば、それは労働生産物の本性から生ずるかのように見える。たとえば、一トンの鉄と二オンスの金とが等価であることは、一ポンドの金と一ポンドの鉄とがそれらの物理的屬性や化学的屬性の相違にもかかわらず、同じ重さであるのと同じように見える。じつさい、労働生産物の価値性格は、それらが価値量として実証される

ことによってはじめて固まるのである。この価値量のほうは、交換者たちの意志や予知や行為にはかわりなく、たえず変動する。交換者たち自身の社会的運動が彼らにとつては諸物の運動の形態をもつのであって、彼らはこの運動を制御するのではなくこれによって制御されるのである。」（前出、八〇ページ）

と述べ、これにつづいてつぎのような説明をあたえているのである。

「たがいに独立に営まれながらも社会的分業の自然發生的な諸環として全面的にたがいに依存しあっている私的諸労働が、たえずそれらの社会的に均衡のとれた限度に還元されるのは、私的諸労働の生産物の偶然的なたえず変動する交換比率のうちにおいて、それらの生産物の生産に社会的に必要な労働時間が、たとえばだれかの頭上に家が倒れてくるときの重力の法則のように、規制的な自然法則として強力的に自己を貫徹するからである、という科学的洞察が経験そのものから生まれてくるためには、その前に、完全に発展した商品生産が必要である。それゆえ、労働時間による価値量の規定は、相対的な商品価値の現象的な運動の下に隠された秘密なのである。この秘密の発見は、労働生産物の価値量のたんに偶然的な規定という仮象を揚棄するが、しかしけつしてその物的な形態を揚棄するものではない」（前出、八〇―八一ページ、傍点―インスティトゥット版のもの、ゴシック体―山本）。

みられるように、ここにマルクスによって明らかにされているのは、さきにあげたクーゲルマンあての手紙の中で述べられていることとまったく同じことである。すなわち、「社会的総労働を一定の割合に配分することの必要性」という、さきの「超歴史的な社会的自然法則」は、ここでは、「（私的）諸労働の社会的に均衡のとれた限度」としてとらえられ、商品生産社会におけるその「超歴史的な社会的自然法則」の「現われ方」。「貫徹の形態」は、さきには「交換価値」であったが、ここでは、「生産物の交換比率」および「相対的な商品価値」という言葉で示されてい

る。そしてさきには、「価値法則」が「それ自身を貫徹する形態」として「交換価値」があげられていたのにたいして、ここでは、「社会的に必要な労働時間による価値量の規定」としての「価値法則」が「変動する交換比率のうちにおいて自己を貫徹する」つまり、「価値法則」が「それ自身を貫徹するのは、交換価値の変動のうちにおいてである」というように説明されている。さきには、もっとも基底的な「本質」「法則」としての「価値法則」とその必然的な現象形態としての「交換価値」を「展開」することのうちにこそ「科学」が存すると述べられていたとすれば、ここでは「相対的な商品価値の現象的運動の下に」隠されている「本質」としての「価値法則」、いいかえれば、「社会的に必要な労働時間による価値量の規定」を「発見」するのは、まさに「科学的洞察」である、と述べられているのである。

(46) 価値の大きさとその変動は、変動する交換比率のうちにおいてのみ、自己を貫徹することができし、またそうしなければならぬ。だが、交換価値の大きさとその変動は、価値の大きさとその変動をそのまま正確に表現するものではなく、これと無関係にも動きうる。「使用価値による制限」がそこに存するからである。そして、それゆえにこそまた、そこに「科学」が存在する所以があるといわなければならないのである。

さて、以上、マルクスのクーゲルマンあての手紙と『資本論』第一巻第一章第四節の中に関連部分についてわれわれがとらえたところを念頭において、さきにかかげた宇野氏の「価値法則」に坎するさまたまな「主張」に眼を通してみると、そこにわれわれは、「あらゆる社会に共通な経済原則」、「貫徹の形態」、「価格の運動」および「価値法則」という四つの言葉についての、無原則的なつかい方と前後矛盾・撞着する「主張」の錯綜、内容のない術学的空語の羅列という、いつもながらの光景の「展開」を見出さないわけにはいかない。①についてはさきにふれたので、以下②から簡単に検討してみることにしよう。

1 まず③では、さきの「社会的総労働を一定の割合に配分する必要性」という「超歴史的な社会的自然法則」は「全社会の労働力を生産手段と共に、それぞれの生産物に必要とせられる程度に応じて配分することによって、年々の再生産を継続するという、経済生活の合理的処理に当然なる、いわばあらゆる社会に共通なる経済の原則」というように言いかえられている。「必要とせられる程度に応じて配分すること」は、「国民が生きていくために、つまり社会的再生産を継続するため」にそうせざるをえないのであるから、「配分することによって、年々の再生産を継続する」というのは、まぎれもないトウトロギーでしかない。しかも、この「配分の必要性」は、「どんな国民でも生きていくためには逃れることのできない自然法則」であって、それは「経済生活の合理的処理に当然なる、経済の原則」などという、資本家の喜びそうな「合理的（*reasonable*）原則」などでは、けっしてない。ところで、宇野氏は、右の「超歴史的な社会的自然法則」について、その「貫徹される形態」は「商品形態」であるといい（③）、つぎには、それは「価値法則によって実現される」といつている。つまり、右の「社会的自然法則」の「貫徹される形態」「実現される形態」は、「商品形態」であつても、「価値法則」であつてもおかまいなし、というわけである。だが、残念ながら、ただの「商品形態」では「貫徹される形態」にはなりえないし、価値法則がその「実現の形態」になったのでは、商品生産社会ははじめから成り立たないことになる。さらに④では、「価格」と「価値法則」との関係がつぎのように説明されている。すなわち、「価値法則は、価格の運動によって調整されると同時に、価格の運動によって貫徹される」と。これは、完全に逆立ちしたたわごとである。いったい、科学的な経済学の初歩を学んだひとで、「価格の運動が価値法則によって調整される」「価値法則は、価格の運動のうちに自己を貫徹する」、という明白な真理を知らないものがあるだろうか？ ところが、右の「超歴史的な社会的自然法則」が「価値法則によって実現される」ということの内容を敷えんして、宇野氏は、「個々の生産物の生産



に必要な労働時間を基準にして、全社会のその生産物にたいする需要に応じて、資本が労働力と生産手段とをそれぞれの生産に投ずること」(⑤)だと述べている。「全社会のその生産物にたいする需要に応じて、労働力と生産手段とをそれぞれの生産に投ずること」というのは、まぎれもなく、「社会的総労働を必要に応じて一定の割合に配分する」ということであり、つまり、「超歴史的な社会的自然法則」そのものを指すことになる。だから、⑤の文章は、「社会的総労働を一定の割合に配分するという社会的自然法則は、価値法則によって実現されるが、それは、資本が、個々の生産物の生産に必要な労働時間を基準にして、社会的総労働を一定の割合に配分することによってである」という、めざましい主張を盛つたものだということになる。これほど素朴なトウトロギーはめったに見当らないが、また、「超歴史的な社会的自然法則」をそのままの形で実現する資本、つまり「理想的に実現するという資本」というのも、さらには、「個々の生産物の生産に必要な労働時間を基準にして、生産する」などという神技をもちあわした「資本」というのも、いずれもこの世では絶対にお目にかかれない代物である。これによってみると、宇野氏の頭の中では、「価値法則」という言葉と「個々の生産物の生産に必要な労働時間を基準にする」という文句とは不可分に結びあわされているようである。だが、「基準にする」という言葉は、いうまでもなく、文字どおり、商品生産社会の「社会的自然法則」とはまったく無縁のものである。

2 ⑥から⑬までは、いわゆる「再生産論」、すなわち『資本論』第二卷第三篇「社会的総資本の再生産と流通」の中に展開されているマルクスの理論を宇野氏が特異な「原理論」的視角から「解釈」したものに氏の「価値法則」なるものを結びつけて論じているものである。本来この第二卷第三篇の内容は、「資本の流通過程」を論究したものであって、その表題の示すとおり、もっぱら「社会的総資本」の「流通過程」の「法則」が主題であって、そこには、さきに述べたような「超歴史的な社会的自然法則」の入りこむ余地はないのである。だが、宇野氏の「原理論」

的眼識は、そこに書かれていないこと、マルクスの主張していないことをも行間に発見するという神技的才能を豊かにそなえているために、そこに「超歴史的な社会的自然法則」を見つけたすことなどは、朝飯前なのである。宇野氏がなくても発見したところをつぎにあげてみよう。

イ「表式は、単に、単純再生産並に拡張再生産のあらゆる社会に通ずる、基本的条件を資本主義社会も商品形態をもって実現するものであることを示すにすぎない。」（⑥）

ロ「……資本は、上述の、基本的条件を基準にして、……複雑な諸条件を……充足し、年々の再生産に必要な生産手段と消費資料との生産に、生産手段と労働力とを配分するのである。」（⑨）

ハ「個々の資本にとっては、……この社会的な経済原則は、価格の運動の内にあらわれる価値法則としてあらわれる。」（⑦）

ニ「商品経済を規制する価値法則なるものは、……あらゆる社会に通ずる経済の原則を根拠として社会的法則となる。」（⑧）

ホ「表式に示される第一部門と第二部門との関係も、そういう、価値法則による、均衡関係を示すものである。」（⑩）

ヘ「……表式に示されるような均衡関係は、価格の運動の中心をなすものとして成立する……。個々の資本の、いわゆる無政府的な生産と蓄積とが、……かかる均衡関係をそのまま実現するものとは、理論的にもいいえない。理論的想定自身も、そういう無政府の生産の内に法則の貫徹を証明しようとするものである。」（⑪）

こらんのように、宇野氏は、まず最初に、「再生産表式は、ただ、再生産のあらゆる社会に通ずる基本的条件を、資本主義社会が商品形態をもって実現するものだということを示しただけのものだ」と述べている。だが、「単純」にせよあるいはまた「拡張」にせよ、「再生産のあらゆる社会に通ずる基本的条件」とは、いったい、なにか？　そもそも「社会」は存続するかぎり、一回かぎりの生産ではなく、必ずくりかえし生産をしなければならない。つまり、生産は当然に再生産でなければならない。だから、生産の条件はつねに必ず再生産の条件でなければならない。要するに「あらゆる社会に通ずる生産および再生産の基本的条件」というのは社会的総生産物の中には必ず翌年の生産「再生産」に必要な生産手

段と生活手段がふくまれていなければならないということであり、つまるところは、「社会の存続にとって必要な生産物の生産のために社会的総労働を一定の割合で配分する」という、さきの「超歴史的な社会的自然法則」に帰着してしまうのである。だが、マルクスが第二巻第三篇で示しているのは、こんな「超歴史的な社会的自然法則」などではけっしてない。まあ試みに、第二巻第三篇第二十章「単純再生産」の冒頭の第一節「問題の提起」の最初のところをひらいてよく読みかえてみたまえ。マルクスはまず「社会的資本の一年間の機能をその結果において考察するならば、すなわち、社会が一年間に供給する商品生産物を考察するならば、社会的資本の再生産過程はどのように行なわれるか、どんな性格がこの再生産過程を個別資本の再生産過程から区別するのか、そしてどんな性格がこれらの両方に共通なのか、が明らかにになるにちがいない。年間生産物は、社会的生産物のうちの資本を填補する諸部分すなわち社会的再生産を含むとともに、消費元本に帰属して労働者や資本家によって消費される諸部分を含んでおり、したがって生産的消費とともに個人的消費をふくんでいる。それはまた資本家階級と労働者階級との再生産（すなわち維持）をふくんでおり、したがってまた総生産過程の資本主義的性格の再生産をふくんでいる」（前出、第二巻、三九五ページ、傍点—山本）と述べ、「われわれの当面の目的のためには、再生産過程はW「商品資本」の個々の成分の価値填補と質料填補との両方の立場から考察されなければならない」（前出、三九六ページ、傍点—山本）と指摘しているのであるが、ここに記されている「W」の個々の成分の価値填補と質料填補」という言葉が示しているのは、社会的生産物が——宇野氏の主張しているように——たんに「商品形態」とをとっているだけのものではないこと、それはすべて資本の生産物として、 $c$ 、 $v$ および $m$ をふくむものであり、したがってわれわれがこの三つの価値部分をしかととらえこれに生産手段と生活手段という質料的区別を組み合せて把握すべきことを示しているのである。それだからこそ、

マルクスは、そのつぎのパラグラフで「当面の問題」を定式化して、「直接に当面する問題は、——生産中に消費される資本はどのようにしてその価値を年々の生産物によって填補されるか、また、この填補の運動は資本家による剰余価値の消費および労働者による労賃の消費とどのようにからみ合っているか？ ということである」（前出、三九六ページ、ゴシック体—マルクス、傍点—山本）と明確に述べているのである。これらのマルクスの叙述のどこに「再生産のあらゆる社会に通ずる基本的条件」などというものが見出されるというのか!? 右に並べた宇野氏の主張の中でくりかえし用いられているのは、「年々の再生産に必要な生産手段と消費資料」とか、「生産手段と労働力との配分」とかいふ、まさに「超歴史的な」形態を示したもののばかりであるが、このように、「社会的総資本の再生産」||「資本家階級と労働者階級との再生産」をたんなる——それも言葉だけの——「商品形態」ととった「生産手段と消費資料の再生産」にすぎない、この超歴史的な「生産手段と消費資料の再生産」と、そのための「生産手段と労働力の配分」という言葉とをつなぎあわせて、まゝまゝと「再生産表式」を氏独特の「価値法則」に直結するという「手品」を演じているのである。ただ、お気の毒にも、この「手品」はあまりにもお粗末すぎて、いたるところでばろを出しているのである。

右に列挙した中で、たとえばロをみてみたまえ。「上述の基本的条件」とは、「あらゆる社会に通ずる再生産の条件」であり、「年々の再生産に必要な生産手段と消費資料とを生産するために生産手段と労働力とを配分すること」である。だから、ロの文章は、正確に表現すれば、「年々の再生産に必要な生産手段と消費資料とを生産するために生産手段と労働力とを配分する」という、再生産の基本的条件を基準にして、資本は、年々の再生産に必要な生産手段と消費資料との生産に生産手段と労働力とを配分するのである」となる。なんと、すばらしい「原理論」的トウトロギーではあるまいか。

⑥においても、「再生産の複雑な諸条件」——といっても「あらゆる社会に通ずる再生産の基本的条件」でしかないが

——をば、「資本」が、同じ「再生産の基本的条件を基準にして」「充足する」と、主張されている。これも「原理論」的トウトロギーのみことな標本である。肝腎の「価値法則」と「超歴史的な社会的自然法則」との「関連」については、宇野氏は、まず「個々の資本にとっては、右の超歴史的な社会的自然法則が、価値の運動のうちにあらわれる価値法則としてあらわれる」(⑦)と述べている。つまり「超歴史的な社会的自然法則」の「現われる形態」が「価値法則」であり、しかも、この「価値法則」は「価値の運動のうちにあらわれる」というのである。すなわち、「価値の運動は価値法則の現象形態であり、価値法則は社会的自然法則の現象形態である」のである！これは三つの言葉——「価値の運動」、「価値法則」および「超歴史的な社会的自然法則」——を、マルクスの叙述の誤読から得た「ヒント」により「現われる」という言葉をつかつてただつなぎ合せただけのものである。これに劣らず傑作の空文句は、二である。すぐ前では、「超歴史的な社会的自然法則」の「現象形態」が「価値法則」であると書いているかとおもえば、ここでは、「価値法則」は同じ「超歴史的な社会的自然法則」を「根拠」にしてはじめて「社会的法則」となるものだ、と書かれている。これは、「根拠」という用語をつかつての「原理論」的たわごとの範例としてしか意味をもたない。ところが、⑫では、またまたひっくりかえって、「価値法則による規制」のおかげで、「超歴史的な社会的自然法則は実現される」ことになり、また、「表式に示される均衡関係」は「価値法則」によって実現されることとなる(⑩)。さらにまた、「価値法則」は「無政府的な生産と蓄積を規制する」が、他方、この「無政府的生产という形で超歴史的な社会的自然法則が貫徹されなければならない」(⑪)とされる。これらの場合には「価値」はどこかへ姿を消してしまっているが、⑬では再び現われて、今度は、「商品経済の法則」という「歴史的な社会的自然法則」が「それ自身」「超歴史的な社会的自然法則を実現する」ために「価値の運動」という「形態」をとらねばならないことになる。ところが、それが「価値の運動という形態をとらねばならない」ということによって、はじめて、「価値法

則」は「法則性」をもつ「根拠」を与えられるのだそうである。これによってみると、さきの「商品経済の法則」というのは、「価格の運動」とも「価値法則」ともまったくちがった別の「法則」であるとしたか考えられないが、いったい、どういう「法則」であろうか？

「再生産表式」と結びつけて直接に「価値法則」を説明している以上の所論のなかには、まだまださまざまな曲解、こじつけ、トウトロギーと空文句が数多く見出されるが、以上にみただけでも、これらの所論がいかにひどいものか、それらが「再生産論」についても「価値法則」についても完全に混乱した理解、というよりは没理解を示すものでしかないかということは明らかだとおもわれるが、こうした迷論の綴り合せから成る、氏の主著の第二篇「生産論」第三章「資本の再生産過程」の第三節「社会的総資本の再生産過程」には、なんと、「価値法則の絶対的基礎」というものともらしい言葉が副題としてつけられているのである。だが、こうした術学的用語が、科学的理論を無視したまったくのまやかしの空文句でしかないことは、これまでの検討によっても疑う余地はないといつてよい。<sup>(47)</sup>

(47) なお、宇野氏は、右の⑨の中で、『資本論』第三卷第六篇「超過利潤の地代への転化」の第三十七章「緒論」のうちの一部分を引用して、「価値法則なるものは、マルクスもいうように『単に各個の商品について……（中略）……必要比例量だけが費やされているという』ように規制するものだ」と述べて、「超歴史的な社会的自然法則」と「価値法則」とを「直結」する氏自身のとらえ方を「根拠」づけようと図っているが、これはきわめて作爲的なすりかえであり、マルクスの叙述の意図的な贋造である。紙数の制限上、ここで詳しく説明することは割愛しなければならないが、マルクスは、そこでは、「特殊な物品にたいする社会の特殊な欲望を充足するために必要な労働」について、「もし社会的総労働の分割が均衡のとれたものであれば、いろいろな群の生産物はそれぞれの価値で（もつと）発展が進めばその生産価格で」売られるか、または、この価値または生産価格が一般的諸法則によって規定されて修正されたものである価格で売られる」と述べ、「それは、実際、個々の商品または物品にかんしてではなく、分業によって、独立化された特殊な社会的諸生産部面の、そのつどの総生産物にかんして効力を

あらわす (sich geltend machen) 価値の法則である。すなわち、ただ各個の商品にかんしてただ必要な労働時間だけが費やされているというだけでなく、社会的総労働のうちから、ただ必要な比例配分量だけがいろいろな群のなかで費やされているということである。というのは、条件はやはり使用価値だからである」(以上、前出、第三卷、六八五ページ、傍点―山本)と説明しているのである。この叙述部分をふくむ箇所は、マルクスが本来個々の生産物「商品の価値を規定する「価値法則」が「生産物」商品の総量」について「効力をあらわす」こと、「社会的総労働のうちからただ必要な比例配分量だけがいろいろな群のなかで費やされる」ということは、「価値法則のいっそう展開された現われ」にすぎないことを解き明かしているところである。つまり、それは、本来の「価値法則そのもの」の内容を説明したのではなく、その「価値法則」の「いっそう展開された現われ」を明らかにしたものであって、さきに述べた「科学の方法」に正しくそった説明なのである。ところが、下心ある宇野氏は、マルクスの「費やされている」ということである」という言葉から「ことである」を削って、「費やされている」という」という文字をば「ように規制する」という氏自身の言葉に直結して、「価値法則が、………費やされている、というように規制する」というのがマルクスの主張だとしているのである。これは、きわめて悪質な偽造であって、このような悪質な改ざんをあえて犯すことのできるの、やはり、世紀的にかさま師を措いて他にはないと考えなければならぬ。

3 ⑬から⑰までは、『資本論』第三卷第二篇「利潤の平均利潤への転化」の第十章「競争による一般的利潤率の平均化 市場価格と市場価値 超過利潤」の中から宇野氏の「価値法則」論なるものをつくりあげるための材料を見つけたし、これをもとにしてこしらえあげたものと考えられるが、それらは、客観的にみれば、いずれも、「生産価格の法則」および「価値法則」にかんする底知れずの誤解と曲解とを露呈するという役割しか果たせないものとなっている。

⑭で、宇野氏は、「価値の生産価格への転化」という言葉をかかげて説明し、「これらはすべて労働の生産物が資本の生産物として商品交換されるということに基づく価値法則の展開である」と述べている。この主張は、「商品交換」という迷語をの

ぞけば、マルクスの見解と同じように見え、したがって正しいものをふくんでいるようにおもわれるが、しかし、それはたんに外觀だけであって、その中味はけっしてマルクスのそれと同じではない。マルクスにおける「価値法則の展開」の意味はすでにさきに説明したが、それは、「価値法則」という、もつとも基底的な「本質」・法則の必然的な現象形態の展開ということであった。ところが、宇野氏にあっては、「価値法則の展開」とは、⑮にみられるように、「価値法則」そのものが、「それ自身を実現する機構を確立し、それ自身を全面的に貫徹させる」ことでしかないのである。つまり、それは、文字通り「価値法則」そのものがそのまま「フルに展開される」ことなのである。ここには、もつとも基底的な「本質」・法則とその必然的な現象形態との関連の把握もなければ、その必然的な諸現象形態の展開の科学的認識という肝腎のことも全く見当らないのである。

⑯の「その個々の生産に要する労働時間を前提とし、それに基いて、それぞれの量において生産される」という文句を見た読者は、おそらくひとり残らず、これは共產主義社会のことを言っているのではないかという錯覚にとらわれるはずである。いったい、誰が、どのようにして「労働時間」をとらえることができるのか？「労働時間」をはっきりととらえることができないのが資本主義的生産の根本的特質であるのに、宇野氏の「純粹資本主義社会」にあっては、「社会の需要する種々なる使用価値」の「個々の生産に要する労働時間が容易に計算され、この労働時間を前提とし、これに基いて、それぞれの量において生産されるということ」が、なんと、「利潤率を通して客観的に規制せられる」のであり、「それによって驚き給うな——「資本は各種の生産物の生産に社会的総労働の均衡をえた配分をなす」(⑰)ことができる、とされているのである。「各種の生産物の生産に社会的総労働の均衡をえた配分をなす」という「超歴史的な社会的自然法則」は、これまでの宇野氏の主張によれば、「価値法則」によって規制されて実現したものであるが、氏の「純粹資本主義社



会」では、「価値法則」にかわって、右の「超歴史的な社会的自然法則」を実現させるのは、にわかに「利潤率」に早変わりしようである。この種の「原理論」的「自然法則実現論」ほど、資本家を欣喜雀躍せしめる「福音」はまたないであろう。宇野氏が、もしこのような推論にたいして「それは誤解である、『価値法則』がその実現の機構を確立され、全面的に貫徹されることになる』ことが、とりもなおさず、『全社会の需要する種々なる使用価値が、その個々の生産に要する労働時間を前提とし、それに基いて、それぞれの量において生産される、という事態を意味するのである』というように論駁されるとするならば、われわれは、もはや、その「原理論」的論法の奇想天外ぶりにたいしては、ひとりのこらず「開いた口がふさがらない」という羽目におちいらざるをえないであろう。そしてそのときには、たとえ宇野氏がわれわれを納得させるために、「いや、労働力の商品化がそれを可能ならしめるのである」と「意味ありげな理由」をつけたとしても、残念ながら、そうした毎度の空文句では、われわれが右の窮状から救い出されることは、決してないであろうことは確実であるといつてよい。

(一九七五・九・一八)